

社会的養護経験者が語る 「支えられた経験」とその意味 ——15人への生活史聴き取りを通して

伊 部 恭 子

〔抄 録〕

本研究の目的は、社会的養護を経験した人々への生活史インタビューの結果から、どのような支援が求められているかを明らかにすることである。本稿では特に、施設退所後の生活のなかで様々な困難に直面しながらも、本人がふりかえてみたときに、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」に焦点をあて、考察した。

方法としては、初回インタビュー（調査協力者31人）から6～10年を経た追調査において、現在までに聴き取りを終えている15人の語りの内容を中心に取り上げる。検討の結果、次のことが示唆された。一つ目は、施設入所中に力をもらったり、支えとなった経験の記憶が、現在の生・生活の営みを支える源になっていること、二つ目は、退所後の生活における不安や困難に直面した時に本人が力をもらったり、支えられたりした経験が、その後の本人の生・生活においても大切なものとして位置づいていること、三つめは、本人自身が何か（誰か）のために役立ちたい、支えたいという意思をもち、その経験からも支えられたり、力を得ていることである。また、これらに通底するのは、本人にとってかけがえのない“個人”・“人（ひと）”との関わりがあり、その関係性のなかで本人自身が受けとめられ、本人の生やニーズが肯定されていることを実感しているということが導かれた。

本稿で得た結果は、15人の語りから例示された一部であり、その内容も個別的であるため、一般化・普遍化に向けての限界がある。今後は、生活史インタビューにおける本人の語りの全体像を見渡し、質的調査におけるナラティブの分析方法を用いた検討が課題となる。その際、語り手の主観的な生活世界の観点から、傷ついた経験やつらかった経験に関する語り（生の営みの困難に関する語り）を含め、本人にとって、どのようなときに、どのような人との関係において、どのようなことが助けとなり生きる力をもらったのか（生の営みの肯定・回復に関する語り）に着目する。そのうえで、社会的養護のもとで育つ子ども・若者への支援について、ソーシャルワークの支援過程と援助関係の理論的検討をふまえて考察することを課題とした。

キーワード：社会的養護 児童養護施設 生活史 支えられた経験、援助関係

I. はじめに－研究背景と目的

1. 施設等退所後の生活における困ったことや不安

社会的養護を経験した人々への支援が課題となっている。子どもの貧困対策とも関連して、地方自治体においても実態を把握し、支援策を検討する動きがみられる。例えば、2017年に京都市が実施した「児童養護施設等退所者の生活状況及び支援に関する調査報告書」では、次のような結果を得ている。有効回答者数91名を対象としたアンケート調査において、“退所直後に困っていたことや不安に思っていたこと（複数回答）”への回答が2割以上あったものは、「生活費等の経済面」（56.0%）、「仕事に関すること」（36.3%）、「親等との関係」（34.1%）、「孤独感を感じる」（29.7%）、「心身の健康面」（28.6%）、「学校や職場での人間関係」（25.3%）、「日常の家事（料理等）」（24.2%）、「就職（仕事探し）に関すること」（22.0%）、「本人の過去や生き立ちに関すること」（22.0%）であった。また、経年による“（調査時）現在困っていることや不安に思っていること等”では、「生活費等の経済面」（41.8%）、「仕事に関すること」（33.0%）、「親等との関係」（27.5%）、「心身の健康面」（26.4%）が2割を超えているほか、結婚、子育て等、ライフステージのなかで新たに生じてくる内容もある¹⁾。

京都市だけではない。近年、複数の地域で、自治体や社会的養護関係団体・組織による同様の調査が実施されている（神奈川県児童福祉施設職員研究会調査研究委員会 2013；大阪府 2017；大阪市 2012；埼玉県 2013；静岡県児童養護施設協議会 2012；特定非営利活動法人杜の家（岡山市） 2014；東京都 2011；2017）。特に東京都の2015年度実施調査では、退所直後に困ったことに関して、前回調査と比較して「孤独感・孤立感」、「金銭管理」、「生活費」の上位3項目は変わらず、施設退所（措置解除）直後に必要な支援では、「生活（衣食住）の仕方への支援」、「経済的支援」、「精神的支援」が前回より増加したという（東京都 2017：52、55）²⁾。

これらの先行調査結果からは、施設等退所者が経済面や生活面、対人関係（親等、職場、友人ほか）、精神面（孤独感・孤立感等）、心身の健康等において、困ったことや不安を抱えている状況が浮き彫りになっており、重複・複合化する場合もある。施設等退所者への支援の必要性は明らかである。

一方、このような施設等退所者の生活上の不安や困難と、支援の必要性は、近年の社会状況のなかで——例えば子どもへの虐待や子どもの貧困等が社会問題となるなかで——新たに浮き上がってきた課題ではない。そのことは、次に述べる先行研究においても指摘されている。

2. 先行研究の検討と本稿の目的

先行研究を概観すると、たとえば片岡（2016：160）は、第二次世界大戦下ならびに戦争直後の養護施設実践の記録を分析し、戦時期から「現在でいうところのアフター・ケアの実践が試みられていた」と述べる。また、伊藤（2016：18）は、児童養護施設のアフターケアに関する最も古い文献は、堀文次（1948）による「保護児童のアフターケア問題」であるという。

最近の研究では、社会的養護のもとで育つ子ども／育った若者の問題の把握と解決に向けて「ライフチャンスの保障」の視点を打ち出した永野（2017）による成果がある。永野は、「社会的養護を経験した若者の困難」について、先行研究をふまえ、「現状では、子どもたちに保護以前に奪われた機会の回復が保障されたかどうかにかかわらず、年齢要件（主に18歳）や家庭の意向によって社会的養護の措置が解除され、社会への自立が強いられている。その結果、社会的養護を巣立つ若者の多くが、進路選択・社会生活への移行過程でさまざまな困難に直面することが報告されている」と述べ、「社会の中で孤立し、居住・教育・保健・就労等の多次元の領域から排除され、困難を抱えさせられている姿が浮かび上がってくる」と指摘する（永野 2017:12-13）。このような状況は、施設からの高校進学が一般化する以前には、義務教育終了後の15歳をその年齢要件として生じていたともいえよう。すなわち、1973年に厚生省（現、厚生労働省）が、「養護施設入所児童等の高等学校への進学の実施について」（通知）を出し、「特別育成費」の支弁によって施設からの高校進学が可能となり、施設の方針としても高校等進学による措置継続が定着する以前には、「15歳」で自立が強いられ、様々な困難に直面していたのである（小川・村岡・長谷川・高橋 1983；青少年福祉センター編 1975；1989；伊部 1995）。時代背景や社会状況によって、それらの具体的な現れ方は様々であるが、15歳での社会生活上の困難は、3年間の措置継続を経た18歳においても社会生活上の困難となっていることが示唆される。

ここでは、さらに永野（2017:38-65）がまとめた社会的養護の措置解除後の生活状況に関する先行研究から紹介したい。永野は、調査方法において量的調査と質的調査から検討し、「量的把握」の調査は、英米のような全数調査や追跡調査がほとんどなく、わずかに実施された調査として、「全国児童養護施設協議会」と「民間の支援組織」によるものを挙げている。そして、永野自ら2010年以降の東京都（2011）等の自治体調査（量的調査）の二次分析を手がけ、「措置解除された若者の生活はデプリベーションとも呼べる状況」と結論づけている³⁾。また、先行研究の「質的把握」では、松本（1987）による「袋小路的生活構造」、長谷川（2000）による「安定度」、全国社会福祉協議会（2009）による聞き取り調査、西田・妻木・長瀬・内田（2011）による「家族依存社会の臨界」、谷口（2006;2011）による「排除と脱出」、伊部（2013;2015 a）による「生活と家族関係・社会関係」、国分らの「退所者のアイデンティティに関する研究」（国分 2001；田中 2004；両見 2005；井上 2015 ほか）等を挙げている。

このほか、近年の先行研究では、自立支援に関する政策の歴史的検討（大村 2015;2017）、大学等への進学や、高校への非進学に関する困難・課題と支援の検討（平松 2017；西本 2016；坪井 2011）、子どものレジリエンスを高める入所時からの支援に関する研究（田淵 2017）、家庭復帰に関する検討（菅野 2016）、「家族の脆弱さに加え障害という複合的な不利を抱えている」子どもの進路指導と職業教育のあり方に関する研究（新藤 2016）、自立を支える施設職員の役割の重要性（櫻谷 2014）、子どもと施設職員との関係性に関する研究（高安

2017；高橋 2011；2013）、施設退所者の人的ネットワーク形成に関する検討（久保原 2016）、退所後の自立困難軽減に向けた可能性としての地域養護活動（井上・笹倉 2017）、現象学の視点から子どもの生の営みや成長を探究した研究（遠藤 2009；大塚 2009）等が蓄積されている。

このように先行調査及び先行研究からは、社会的養護において施設等を退所した人々の生活上の困難や社会的不利、社会的な疎外や排除の問題とともに、支援のあり方について検討がなされている。しかしながら、本人が生きていくなかで様々な状況に直面したときに（あるいは直面しながらも）、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」という視点からの言及は十分なされていない。

よって、本研究は、社会的養護を経験した人々（以下、社会的養護経験者）の生活史インタビューにおける語りの内容分析を通して、どのような支援が求められているのかを明らかにすることを主眼とする。そのなかで特に本稿の目的は、これまでに追調査の協力を得た 15 人を対象に、退所後の生・生活のなかで「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」に関する語りに焦点をあてて検討する。そのことを通じて、限定的ではあるが、どのような支援が求められているのかを探索的に考察する。

Ⅱ．研究の視点と方法

1. 研究の視点

筆者は、これまでに社会的養護経験者の生活と家族関係・社会関係に焦点をあてて検討し、本人のニーズに基づく支援のあり方を考察することを目的として、生活史聴き取りを行ってきた（伊部 2011；2012；2013；2014；2015 a；2015 b）。インタビューの実施期間は 2007～2011 年度で、調査協力者は 31 人であった（以下、A 調査）。その結果、次の 4 点が示唆された。第 1 に施設入所前の生活では、多様で複合的な生活困難・生活上の不安があり、安心・安全ではない環境におかれていたり、本人の成長・発達への影響を受けていたり、本人の生が脅かされるような状況がある。第 2 に、施設入所中には、施設職員をはじめ他者との関わりのなかで、自身が安心・安全だと思える環境にあり育ちや成長を実感できること、他者からの愛情に確信をもてること、自分で自分のことを決めていくプロセスを支えられること等から、生きていく力を得ていく（回復していく）。第 3 に、施設退所後の生活困難は多岐に渡り、原家族との関わりや、就労、心身の健康、結婚や出産等、ライフステージのなかで直面する困難や不安がある。特に 10 代～20 代にかけての見守りや危機介入、他の社会制度の紹介等の支援が求められると同時に、30 代以降も予期せぬトラブル等が生じた時に他者からの見守りや助言等が本人の助けとなる。第 4 に、様々な困難に直面しながらも、生き抜いてきた背景には、本人にとって何らかの支えや力をもらった経験が意味をもっているのではないかということである⁴⁾。

このようなことから、社会的養護の措置解除後、児童期から成人期にかけての本人の生・生活の営みと、求められる支援について、さらに追跡して検討する必要性があった。よって、A

調査の協力者が、その後どのような生・生活を営み、どのような困難があり、どのような支援を必要としているか、また生きていくうえでどのようなことが支えになっているかの把握を目的として、追調査を計画した（以下、B 調査）⁵⁾。

本稿では、B 調査の結果を中心に検討する。研究の視点は、B 調査においても、A 調査と同様であるが、特に、調査協力者が生を継続し、生活を営んでいくなかで、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」に着目して検討を行う。

2. 研究の方法

(1) 調査方法と対象（B 調査）

前回と同様、児童養護施設、自立援助ホーム、当事者活動等の協力を得て実施した。対象者は A 調査時の調査協力者 31 人で、このうち現在までに協力を得たのは 15 人である（表 1）⁶⁾。

調査方法は、自由度の高い半構造化インタビューで、一人あたり 1～2 回、一人あたり平均約 3 時間であった。インタビュー内容は、調査協力者の承諾を得て録音し逐語録を作成した。

(2) 倫理的配慮

B 調査の実施に先立ち、佛教大学「人を対象とする研究計画等審査申請書」について倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号 H 26-41）⁷⁾。

(3) 調査期間・調査内容（B 調査）

調査期間は、2015 年 4 月～2018 年 2 月現在である。A 調査実施から、B 調査実施までの年数は、調査協力者個々によって異なり、6 年以上、10 年以下となっている。

主な質問項目の柱は、以下の通りで A 調査と同様である。ただし、インタビューの進め方として、B 調査では前回からかなり時を経ていることや、調査協力者が出生時からの状況を再び遡って話すことの物理的・精神的負担を軽減するため、インタビューの冒頭において、A 調査時の聴き取りの概要をふりかえり、お互いに確認と共有をしつつ、それらに関する状況の変化や、現在の思い等を改めて聴き取った。また、当然であるが、A 調査時以降から現在までの生活状況、家族関係・社会関係等については今回新たに聴き取っている。

〈主なインタビューの柱〉

- ・これまでの生活の歩みと、経験した大きな出来事と対処について
- ・これまでの生活の歩みにおける家族関係や社会関係について
- ・児童養護施設等の社会的養護における生活や受けてきたケアについて（入所に至る経緯、入所中のこと、退所に至る経緯、退所後の施設との関わり等）
- ・現在の生活と将来について（希望や夢、目標等を含む）

- ・ 家族や家庭についての思い・考え
- ・ 生きていくうえで大切だと思うこと、支えになったこと
- ・ 現在、社会的養護を受けている子どもたちに伝えたいこと
- ・ 社会的養護、社会福祉に関して思うことや意見、等

3. 分析の手続き

データ分析の手続きは、以下の手順で実施した。第1段階では、インタビューの結果として得たデータ（音声データ、一次資料）の逐語録を作成した（文字データ、二次資料）。

第2段階では、全体の逐語録の内容から、生活状況や家族関係・社会関係の概要と、「生きていくうえで大切だと思うこと、支えになったこと」（上述の〈主なインタビューの柱〉より）を中心にデータを抽出した。特に、調査協力者一人ひとりの語りにおいて、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」という内容に着目する。語りでは、必ずしも「支えられた」という表現を用いないこともある。よって、「助けになった」、「よかった」、「みていてくれた」、「〇〇してくれた」、「〇〇のおかげ」等の表現を取り上げた。なお、支えられた経験を通して「今度は〇〇していきたい」という、自分自身が誰か（何か）のためにしていきたいという内容を語る人もおり、そこにも着眼した。

第3段階として、それらの内容を、意味のまとまりに沿って要約、再構成した。その際、個人が特定されないよう研究倫理に留意し、方言や固有名詞、地域性等の情報を修正している。後掲の表2では、この手続きによる主な内容を取り上げ、例示している⁸⁾。

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査協力者の属性・概要

まず、対象となる調査協力者15人の属性・概要を示す（表1参照）。

(1) 年齢・性別

調査時の年齢は20代後半から40代後半で、平均年齢は35.5歳、このうち、男性は10人（平均36.8歳）、女性は5人（平均33.0歳）であった⁹⁾。

(2) 入所理由・背景

施設入所理由や背景は、親の死亡や不明、離婚により、15人全員がひとり親のもとにあった。ひとり親家庭となった後に、「（親が）育てられなくなって」（養育困難）すぐに施設に入所した人は6人（Dさん、Eさん、Gさん、Iさん、Nさん、Oさん）である。また、ひとり親家庭のもとで生活していたが、「食べるものが無くて、お風呂に入れず、学校に行けなくなった」・「電気・ガス・水道が止まったこともあった」・「一時は車で移動してホームレスのような状況だった」（ネグレクト）、実親や義親、親戚等から「殴られたり、けられたりした」・「叱られて一晩中正座させられた」・「夜中に嫌なことをされた」・「きょうだいに暴力をふるって

て、つらかった」（被虐待）、「ずっとお酒を飲んでいた」・「精神を病んでいた」（親の心身の不調・疾病）等の状況が深刻になるなかで、保護されて施設入所となった人が9人（Aさん、Bさん、Cさん、Fさん、Hさん、Jさん、Kさん、Lさん、Mさん）であった。後者の9人の場合は、親が子どもを手元に留めてなんとか生活を維持しようとするものの立ち行かなくなり、子ども本人の非行や不登校等から「問題」や「課題」が浮上して、警察や学校、生活保護ケースワーカー等を介して児童相談所に相談・通告がなされていたり、生活が成り立たなくなるギリギリのところで親や子ども本人自ら相談がなされ、児童相談所に一時保護されたりして

表1 調査協力者の属性・概要

| ID | 年齢 | 性別 | 入所理由 | 入所時年齢 または学年 (最初) | 退所時年齢 または学年 (最終) | 入所期間 (通算) | 主な生活の場 (社会的養護の 入所前後を含む) | 学歴 | 就労 (収入源、 家計) | 居住形態 | 家族構成 (同居) |
|----|------------------|----|---------------|------------------------|------------------------|--------------|---|---------------|------------------------|--------------|-------------------------------|
| A | 30代前半 (20代前半) | 女 | 父の死 ネグレクト | 小5 | 短大卒まで | 約10年 | 家庭→a 養護→家庭(約1 年半)→a 養護→独居→ 【家庭】 | 短大卒 | 非正規 (パート等) | 賃貸 | 夫・子(3) (←夫・子(2)) |
| B | 40代前半 (30代前半) | 男 | 父の死 ネグレクト | 10歳 (小4) | 高卒まで | 約9年 | 家庭→養護→独居→【家庭】 | 高卒 | 正規 (←無職 (解雇)) | 賃貸 | 妻・子(1) (←單身) |
| C | 30代前半 (30代前半) | 男 | 親の離婚 被虐待 | 小4 | 19歳頃ま で | 約10年 | 家庭→養護→独居→【家 庭】(→離婚(子どもは妻 引き取り)→【家庭】 | 高卒 | 転職・リハ ビリティ (←正規) | 持ち家 (←賃貸) | 妻・子(1) (←妻) |
| D | 30代前半 (20代前半) | 女 | 親の離婚 養育困難 | 3歳 | 小5末まで | 約9年 | 家庭→養護→家庭(時々友 人宅)→【家庭】→離婚→ 【家庭】 | 高校中退 | 無職(時々 パート)、 生保 | 賃貸 | パートナ ー子(3) |
| E | 30代前半 (20代後半) | 女 | 親の離婚 養育困難 | 5歳 | 小5末まで | 約7年 | 家庭→養護→家庭→自立→ 家庭(時々友人宅等)→ 【家庭】→離婚・離別等→ 【家庭】 | 高校中退 | 非正規 | 持ち家 | パートナ ー子(2) |
| F | 30代後半 (30代前半) | 男 | 親の離婚 被虐待 | 小2頃 | 17歳頃ま で | 約10年 | 家庭→養護→独居(職場 寮、友人宅等)→独居 | 中卒 | 正規 | 賃貸 | 单身 |
| G | 40代前半 (30代後半) | 男 | 親の離婚 養育困難 | 4歳頃 | 15歳頃 | 約11年 | 家庭→乳児→養護→家庭→ 独居→【家庭】 | 高卒 (定時制) | 正規 | 賃貸 | 妻・子(2) |
| H | 40代前半 (30代前半) | 女 | 親の離婚 ネグレクト | 中2 | 高卒まで | 約5年 | 家庭(一時親戚宅)→養護 →家庭→独居→【家庭】 | 高卒、専 門学校卒 | 正規 | 賃貸 | 夫 |
| I | 30代後半 (30代前半) | 男 | 親の離婚 養育困難 | 0歳 | 大学卒まで | 約23年 | 乳児→養護→独居→【家庭】 | 大卒、専 門学校卒 | 転職・正規 (←正規) | 賃貸 | 妻、子(1)・ 息子(1) (←妻・子(1)) |
| J | 20代後半 (20代前半) | 男 | 養育困難 ネグレクト | 17歳 | 19歳 | 約2年 | 家庭(一時ホームレス)→ 自ホーム→独居 | 中卒 | 非正規 | 賃貸 | 单身 |
| K | 20代後半 (10代後半) | 男 | 親の離婚 被虐待 | 3歳 | 18歳 | 約16年 | 家庭→養護→自ホーム→独 居(職場寮→アパート) | 中卒 | 無職、生保 | 賃貸 | 单身 |
| L | 20代後半 (20代前半) | 女 | 親の離婚 被虐待 | 小3 | 中3末まで | 約7年 | 家庭→養護→家庭→シェ ルター→自ホーム→独居→ 【家庭】 | 高卒 | 正規 | 賃貸 | 夫(←單身) |
| M | 40代後半 (40代前半) | 男 | 親の離婚 被虐待 | 小4頃 | 15歳頃 | 約6年 | 家庭(親戚宅等含む)→c 養護→家庭→d 養護→独居 (職場寮、アパート)→【家庭】 | 高校中退 (定時制) | 正規 | 持ち家 | 妻・子(2) |
| N | 30代前半 (20代後半) | 男 | 父不明 養育困難 | 3歳 | 18歳 | 約15年 | 乳児→養護→独居(職場寮 →アパート) | 大卒 | 正規 | 賃貸 | 单身 |
| O | 30代後半 (20代後半) | 男 | 母の死 養育困難 | 0歳 | 高3夏頃 | 約18年 | 乳児→養護→家庭(時々友 人宅)→独居→同居 | 大卒 | 正規 | 賃貸 | パートナ ー |

注1：記載内容は、インタビュー実施時のものである（2015～2018年度 B 調査）。ただし、「年齢」欄及び「家族構成（同居）」欄の（ ）内は、前回の A 調査時（2007～2011 年度）を示す。また、「主な生活の場」等の（波線部分）は、B 調査時における、A 調査時以降からの異なる状況を示す。

注2：表中の用語は、以下のように省略する。乳児院：乳児、児童養護施設：養護、児童自立支援施設：自立、自立援助ホーム：自ホーム。原家族（出身家族）による家庭：家庭、結婚等によって新たに形成した家族（形成家族）による家庭：【家庭】

注3：自立援助ホームが措置事業に転換されたのは2009年度からであるが、本稿では、2009年度以前についても社会的養護における施設に組み込んで記述している。

いる。すなわち、生活の営みと家族関係において、不安・不安定・困難という状況が極わり、生活の危機におかれ、施設等への入所に至っていることが改めて分かる。

(3) 入所年齢・退所年齢・入所期間（通算）

入所期間は、最も短い人（Jさん）で、自立援助ホーム入居のみの「約2年」、最も長い人（Iさん）で、乳児院と児童養護施設を経験した「約23年」であった。上述のJさんは、「妹が児童養護施設に行くことになり、お小遣いも出ると喜んでいて、自分もそこに行きたかった。家での生活は限界。児童相談所の人に自分から児童養護施設を希望したけれど、年齢が高くて無理ということで、自立援助ホームになった」と語っている。

また、本人の語りから措置解除の年齢ははっきりしないが、高校卒業後も施設のある一室を借りて生活をしていた期間のある人が3人いた（Aさん、Cさん、Iさん）。3人とも「親元には戻りたくなかった」、「親のいるところに戻れる状況になかった」と、親元での生活が困難な状況にあった。AさんとIさんは進学しながらアルバイトをして貯金をし、学費等は「施設からお金を借りて少しづつ返してきた」という。Cさんは、高校卒業後の1年間を施設の1部屋を借りて生活し、その後アパートを借りて独り暮らしに移行している。Cさんは「働きながらお金を貯めることができた。いつも施設が身近にあったので安心できた」と語る。3人の語りからは、18歳以降も本人の状況に応じて一定の期間、施設の敷地内で生活し、その後、地域社会での生活に移行できたことが「助けになった」、「よかった」と受けとめている。

このほか、施設退所の時期と理由に関して、「（当時は）家に帰りたかった」という人はDさん、Eさん、Gさん、Hさん、Lさん、Oさん、「施設を出たかった」、「施設を出て、やってみみたいことがあった」という人はFさん、Mさん、「（年齢的に）出なくてはいけなかったので、（施設を）出た」、「18歳で施設を出ることはわかっていたので、そのつもりだった」という人はBさん、Jさん、Kさん、Nさんであった。

(4) 学歴

最終学歴は、中学校卒業が6人（このうち高校中退は3人）、高校卒業が4人、高校卒業後の進学は5人であった。高校卒業後に進学した5人の内訳は、4年制大学卒業が3人（内、1人は大卒後に専門学校へ進学）、短期大学卒業が1人、専門学校卒業が1人となっている。

A調査時から6～10年が経過したB調査時現在、Iさんを除いた14人の学歴に関する変更はみられない。Iさんは、大学卒業後、転職に伴う免許・資格取得のために専門学校に進学して卒業し、その資格を有した専門職に就いている。

A調査時に「高卒認定資格を取りたい」と語っていたJさんは、B調査時では「仕事が忙しかったり、精神が不安定な時期もあり、うまくいっていない。東日本大震災の頃、自衛隊の学校に行って何かできればと思ったこともあるが、そのままになってしまった」と語る。

また、定時制高校をすぐに中退したMさんは、B調査時に「自分の時は、まだ就職先もあったし、人の縁でやってこれた。でも今の時代は違う。家庭をもってからは、自分の子どもに

は好きなことをさせてやりたいし、高校、大学も行かせてやりたい。お金も必要」と語る。

（5）生活の場・就労・居住形態・家族構成

表1では、調査協力者本人の生活の場、就労状況、居住形態、家族構成について、概要のみ示している。A 調査時を経て、B 調査時現在、どのような状況にあるのかを端的に示す。

まず、生活の場と居住形態に関して変更があったのは、B さん・L さん（結婚による転居）、C さん（再婚してローンで家を購入）、D さん（離婚し、転居）、O さん（パートナーと同居）である。

就労状況について、A 調査時から同じ仕事（職業）に就いている人は、F さん、G さん、H さん、J さん、L さん、M さん、N さん、O さんであった（職場の異動や昇進、職務内容の変更を含む）。転職して正規雇用で仕事をしている人は B さんと I さんである。子育てをしながら非正規やアルバイトをしている人は A さんと E さんであった。

D さんは離婚後、心身の不調もあり、生活保護を受給しながら子ども2人を育てている。K さんは、前回の A 調査時と同じく、継続して働くことが困難な状況にあり、生活保護を受給している。C さんは転職してまもなく事故に遭い療養・リハビリ中であった（「労災が出ているのが何より。今は妻の扶養に入っている」とのことであった）。

家族構成（同居）では、A 調査時以降、結婚・パートナーと同居の人が3人（B さん、L さん、O さん）、本人やパートナーが出産した人が3人（A さん、B さん、C さん）、里子を育てている人が1人（I さん）であった。現在子育て中の人は8人（A さん、B さん、C さん、D さん、E さん、G さん、I さん、M さん）で、このうちひとり親家庭で子育てをしているのは2人（D さん、E さん）である。夫婦またはパートナーのみと同居の人は3人（H さん、L さん、O さん）、単身は4人（F さん、J さん、K さん、N さん）であった。

このように、今回、追調査として聴き取りをすることができた15人は、それぞれの生活において転職や異動等に伴うストレスや不安、心身の不調・疾病、事故などの出来事、人間関係に関する困難やストレス、子育ての大変さ等を抱えながらも、全体としては、就労状況と収入、住居、家族構成と家族関係、公的制度の利用（生活保護制度等）心身の健康等のいずれかが比較的安定し、維持されていることが示唆された。例えば、C さんは前職場での過労と「生死をさまようほどの事故」を経験したが、同居家族があり、職場からも労災が出ている。「生活保護を辞めて働くことを目標」とする K さんは、人間関係のストレスや心身の不調などの生きづらさを抱えながらも、生活保護受給の継続性により、生活を営むことができていた。

なお、表1には示していないが、実親との関係性にも変化がある。「親とはほどほどに」（F さん）、「電話が来たら話を聞くようにしている」（H さん）等、本人が実親との距離や関わり方を自分なりに調整している人は、C さん、D さん、E さん、F さん、G さん、H さんの6人であった。また、実親が死亡した人は3人で、「葬儀には行ったけれども、親を許せたかど

うかはわからない」Aさん、「葬儀に行きたかったがきょうだいの気遣いから知らされず行けなかった」Bさん、「親が死ぬ前に自分の仕事を認めてくれて、嬉しかった」Oさんである。

B調査時現在も、実親との不和や諸事情により連絡を取っていない人は2人（Jさん、Lさん）である。実親が行方不明等で連絡が取れない状況にある人は、4人（Iさん、Kさん、Mさん、Nさん）で「今はホームレスの状況にあるかもしれない」（Mさん）、「子どもの時は気になっていたけれど、今はもういいかなと思っている」（Nさん）、「親もきょうだいもどうしているのかわからない」（Kさん）、「自分には連絡がなくても、いざという時にはきょうだいに連絡してくるはずなので、そこから分かると思う」（Iさん）と語っていた。

2. ふりかえてみて、生きていくなかで「力をもらったこと」、「支えになっていること」、「していきたいこと」

表2は、調査協力者15人が、今ふりかえてみたときに、施設等退所後、生を継続し、生活上の様々な困難や不安に直面するなかで、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」について語った内容の主な例示である。支えられた経験を通して、自身が「〇〇していきたい」という語りについても取り上げる。

(1) 力をもらったこと、支えになっていること

ここでは、①入所中の思い出や記憶が今も支えになっていること、②退所後の生活において支えられたこと、に分けて述べる。①、②それぞれの内容を整理し、分類を試みた。

①施設にいた間に力をもらったこと、支えられたことが、今も支えになっている

i) 自分のために何かを「与えてくれた」・「してくれた」

15人全員の語りがある。例えば、足が痛い時に「ずっと足をさすって（くれた）」（Dさん）、「（制服の）アイロンをかけてくれていて」（Nさん）など、主に施設職員が本人のために何かをしてくれたという記憶は、A調査時だけではなく、今回のB調査でも語られていた。

また、「ほめてくれて叱ってくれて」・「親代わり」（Lさん）、「愛情を注いでくれた」（Fさん、Gさん）のように、愛情を受け取っていることが分かる。「施設ではいろんな人（職員）から『いい子だね、いい子だね』と言ってもらえて」というHさんは、9年前のA調査と、同じ内容を同じような声のトーンで語っており、深く記憶に刻まれている様子であった。

ii) 「尊重してくれた」・「自分らしくいられた」

例えば、「（家に帰りたくなかった僕の気持ちを）施設の職員が尊重してくれた」（Bさん）、「人間としてみてくれていた」（Eさん）、「『Mらしいなあ』言っに行かせてくれた」等、施設職員との関わりにおける語りがある。なお、人間の尊厳やその人らしさが大切にされているという語りの内容は、他のi)、iii)、iv)と重なるともいえる。

iii) 「偏見のない人がいてくれた」

施設の中だけではなく、「普通の家庭で育った友達」がいてくれたことがよかったというO

表2 今ふりかえてみて、「力をもらったこと」、「支えになっていること」、「していきたいこと」

| ID | 主な内容の例示 |
|----|---|
| A | <p>・施設は育ててくれたところ。施設の先生方は、その場だけではなくて、人間と人間との関係をつくってくれた。私が一番好きで甘えていた〇〇は、退所する最後の日に「Aをここから見送るのはこれが最後だね」と言ってくれて。それまで私を見送ってくれた毎日があって・・・施設を出てからも気にかけてくれて、年1回でも会うと必ず別れ際に私がいなくなるまですごい笑顔で見送ってくれる。</p> <p>・妊娠した時に、産むか、堕ろすか考えて迷ったけれど、元の施設の先生に相談して、「産みたい」と思えて・・・先生方が必要なものの準備や、心配してくれて、出産当日も立ち会ってくれて、心強く、安心できた。</p> <p>・子育てでイライラしたり、「こうしないといけない」とがむしゃらになっていた時に、△△が声をかけてくれて、「ゆっくり自分のペースの働き方でいいよ」と、ここ（元の施設）でアルバイトさせてもらっている。</p> <p>・ずっと「私が家族をまもらないといけない」と必死だったけれど、今は、そうではなくて「家族、夫や子どもから、私が守られている、包んでくれる」と気づいた。特に何かをしてくれるわけでもなくとも、安心感がある。</p> <p>・ももとの家族は不安定な関係のなかで育ってきて、施設ではよくしてもらったけれど他人同士のつながりでもあって、今の家族は、唯一、切れない初めてできたつながり、関係で、存在そのものが私の意義と思っている。</p> <p>・自分ひとりで頑張ってきたのではなくて、周りに生かされてきたのだと思う。子どもたちには、「ぶつかったら助けてあげるよ」というスタンスでみていきたいと思う。</p> |
| B | <p>・10歳位の頃に、施設から家に帰る話が出ていた時、僕は「帰りたくない」と言っていて、施設の職員が尊重してくれた。あの時、家に帰っていたら、今の自分は無かったと思っている。</p> <p>・施設にいた時は、人見知りでのそばで話を聞いているのが好きだった。職員のそばで話を聞いていて、だんだん自分から話をしたくなって、自分の話を聞いてほしくなって、職員は家事とかしないで、とにかく話を聞いて欲しいと思っていた。今考えると、施設では、「こうしたい」という自分の気持ちを出させてくれていたのかなと思う。</p> <p>・解雇されて転職を考えていた時に、前の施設の〇〇に相談したら、「働きながら大学に行くという方法もある」と言ってくれた。自分が施設にいた頃に「大学に行きたい」と言っていたことを覚えてくれていて嬉しかった。</p> <p>・退所してからしばらくの間は、個人的に〇〇とご飯を食べに行ったり・・・結婚して仕事も忙しくなって、会うのはできなくなったけれど、たまにメールをする。子どもがもう少し大きくなったら、見せにいきいたい。</p> <p>・家では妻に家事の負担をかけないようにしている。施設では掃除もお風呂洗いや料理もしてきて得意なので・・・</p> <p>・子どもには夫婦で一緒に叱らずに、一方はフォローするようにしている。子どもには、自分がしたいと思うことをしていってほしい。</p> |
| C | <p>・小学生の頃、施設に来たのは、万引きをして悪いことをしたからだと思っていた。でも、「Cが悪いのではなくて、虐待があったからだ」と〇〇が僕に分かるように話してくれた。</p> <p>・施設では、知らず知らずのうちに、自分がしたいことやチョイス（選択）ができるようになって、人間になれた。</p> <p>・就職が決まって、ひとり暮らしが不安だった時、お金が貯まるまでの1年位、施設で住む場所を提供してもらえた。</p> <p>・結婚して子どもができて、体調を崩し、借金もあって、離婚となった時に、元の施設の△△から、「働いている間、ここで子どもを預かってもいいよ。私が面倒みるよ」と言ってくれて、それだけはしたくない、（自分がそうだったこと）と同じになってしまうと思っていたけれど、その言葉をかけてくれたことがどんなに嬉しかったか。</p> <p>・今は、施設の△△とは個人的なつながりでたまにご飯やメールをする程度。仕事に行く途中、交通事故に遭って生死を彷徨っていた時に、△△がお見舞いに来てくれて。施設で仲よかった友達や親も心配して見舞いに来てくれて。</p> |
| D | <p>・小学生の頃、父親に会いたくて時々、無断で施設を出て家に帰った時に、（父親が仕事でいないので）玄関で待っていると、施設の人が迎えに来てくれて、一緒に帰ったのをよく覚えている。夜中に寝ぼけて「パパのところに行く」と飛び出そうとしたときも、止めてくれたり、寝かしつけてくれたり、甘えていたのかなと思う。</p> <p>・成長痛が何かで「足が痛い」と言ったら、施設の人がずっと足をさすって湿布を貼ってくれて、よく覚えている。</p> <p>・施設にいた時に犬を飼いたくて、施設の人に言ったら飼ってくれて、私が名付けた。家に帰る時に犬も一緒に連れて帰ってきたけれど無理とわかって。そうしたら施設の人たちがここで（施設で）、ずっとかわいがってくれていた。</p> <p>・家に帰りたくて帰ったけれど、今度は施設が恋しくて、遊びに行ったりしていた。よく受け入れてくれたなと思う。</p> <p>・子どもができて墮落そうか悩んだ時に、きょうだいや知り合いの人が、産んだほうがいいと言ってくれた。</p> <p>・助けてもらってばかりの人生。精神的に不安定になったり、家事もできなかったり。子どもは手元で育てたいし、子どもからも助けてもらっている。元の施設でアルバイトさせてもらって、〇〇に相談ののってもらったりする。</p> |
| E | <p>・施設にいた間は短かったけれど、そこでの習い事が楽しくて、家に帰ってからも、その時間だけは遊びに来て、させてもらっていた。</p> <p>・施設を飛び出したり、ずいぶんやんちゃしたけれど、ここの施設の人を私を人間としてみてくれていたと思う。</p> <p>・退所してからは、DV、離婚、子どもの火遊びで火事になったり、病気したり、借金もあって、人生波瀾万丈だけれど、今ふりかえてみると、施設にいた時の自分は、受け入れてもらっていたなと思う。</p> <p>・父親は、定年まで同じところで働き続けて、家の購入を助けてくれた。その家のおかげで私も生活できた。</p> <p>・水商売は大変な時もあったけれど、子育てのことや情報をもらったり、仕事仲間に助けられたこともあった。</p> <p>・きょうだいが身近にいて、どんなことも話せて支えられた。今はいろいろあって、少し距離をおいてみまもっている。</p> <p>・今は生活も安定してきて、介護の仕事や、町内会活動で少しでも人と関わったり、役に立てるのが楽しい。</p> |

表2 (つづき)

| | |
|---|--|
| F | <ul style="list-style-type: none"> ・どんなに施設を飛び出しても、悪さばかりしても、〇〇は自分を見捨てなかった。その人には今も頭が上がらない。その人がいなかったら、今の自分はいなかったと思う。愛情を注いでくれた。 ・布団がふかふかで、その布団が最高に心地よくて忘れられない。そこで寝たくて、施設に帰ってきていた。 ・施設を出て悪さをし尽くして、行くところも無くなって、〇〇に相談したら、今の仕事を紹介してくれた。3年はそこで働くことになって、裏切るというのも好きじゃなかったし・・・そこからずっと続けている。 ・20代半ばで出会った、その職場の先輩から、いろいろなことを学んだ。努力の塊、自分のことより、人のことを考えている、そういう気づきのできる人で、その先輩のようにになりたい。自分の考え方が変わり、自分を信頼してもらえるようになってきた。 ・ふりかえると、人との出会いに恵まれていた。自分の人生の分岐点は、人との出会いだと思う。 ・仕事では責任のある立場になってきた。スタンスは変わらないが、人に喜んでもらえる仕事をしたい。 ・離れて暮らす母親とは、メールでやりとりをするようになった。元気なうちに、一度ご飯を食べたい。 |
| G | <ul style="list-style-type: none"> ・家に帰りたくて15歳位で帰ったけれど、その後が大変で。何年かはしょっちゅう、ここに（施設に）飯を食いにきていた。お風呂にも入らせてもらって、こっちのほうが家みたいに居心地よくて。そのことで施設の職員から叱られたことは一度もなかった。 ・高校には卒業証書だけは欲しくて通って卒業、親は学費だけは出してきてくれた。 ・何度も転職して20代半ばで今の仕事に。妻になる人の親が、「向いているのではないか」と紹介してくれて。 ・基本的に自分は性格的に弱いと思っている。自信をつけるために筋トレとか鍛えるのが好き。ふりかえてみると、施設にいる時から運動が好きで、地域の少年団チームのサッカーとかもさせてもらっていた。 ・子どもが生まれて、妻と一緒に最初に、自分のいた施設の職員に見せにいった。実家みたいな感覚。 ・親にだけは止めようとして話をしている。過保護になりすぎるので、子離れしないといけないと思っている。 ・父親との距離は、お互い年をとって縮まってきた。対等に話せるようになってきた。 ・大切なことは「継続」だと思う。あきらめずにマイペースで続けること。 ・施設は愛情を注いでくれた。育ててくれたところ。灯台のよう。生みの親はいるけれど、〇〇は育ての親。 |
| H | <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの頃は鈍感な方で自由奔放だったけれど、大人になった今は慎重で共感性が強すぎるせいか、人とのコミュニケーションに疲れ過ぎてしまうことがある。施設ではいろんな人（職員）から「Hはいい子だね、いい子だね」って言ってもらえて嬉しかった。 ・特に私をみてくれたのは施設の〇〇と小学校の部活の先生。部活の先生お土産を今も宝箱に入れている。 ・〇〇は、私が専門学校に行っていた頃に、「Hなら安心だから」と自分の子どもを預けてくれてびっくりしたけれど、人として信頼してくれているのが分かって嬉しかった。今は、その人とは個人的な関わりで、たまにメールをしたり、ご飯を食べたり。子どもの養育に係る仕事をしているが、「Hが働いているところに、孫を預けたい」と言ってくれて、本当に嬉しかった。 ・生い立ちのこともあって、結婚の時は義父母からの反対が心配だったけれど、偏見もなく、むしろ応援してくれた。流産した時も「あなたの命があつてよかった」と泣いてくださった。義父母は近くに住んでいて、毎年誕生日のお祝いをしてくれる。夫と私も義父母の誕生日には、食事やプレゼントなどささやかだが続けている。 ・ゆくゆくは実の親のこともみまもりながら、義父母と同居して介護することも考えている。 ・仕事では、昇進等のストレスで辞めたかった時に、職場の人が受けとめてくれた。上の人に本当に育ててもらったので、私が若い人を支えていかないと・・・と思っている。 |
| I | <ul style="list-style-type: none"> ・それまでは担当の職員も勤務とかでコロコロ変わったけれど、小学高学年頃から〇〇がそばにいてくれるようになって、物質的な面とか精神的な面の支えをしてもらって、それは大きかった。 ・親じゃなくても、一つのところで安心して安定した環境のなかで過ごせるっていうのは大事だと思う。 ・印象に残っているのは中学卒業後の進路のことで〇〇から、高校に行く・行かない・ここしかない、ではなくて、頑張って成績がこうなれば、自分で高校も選べるって話してくれたこと。それで自分で選びたいと思うようになった。 ・施設に就職を希望して、やりがいもあったけれど、助けてもらっているような時もあるって、自立しきれていないと思うようになった。結婚して子どもも生まれて、ますます外でやってみたいと思い、転職を決めた。 ・転職して引越しても、生活面では、近くに住んでいる妻の義父母に助けてもらった。 ・里親をしようと思ったのは、自分の子どもにも、一緒にきょうだいのように育つ人がいたらいいな・・・と思ったのと、人の育ちに関わりたいたいというのがあって、妻も同じ思いだった。 ・今、施設ですっと関わってくれた〇〇は、目の前にはいないけれど、この辺（頭の周囲の空中を指さす）にいてくれる感じ。近くにいないくても見えなくても、いつもこの辺にいてくれる感じ。 |
| J | <ul style="list-style-type: none"> ・自ホームでは、初めて自分の部屋の鍵を閉めて、自由にお風呂にも入って、感動だった。ここに来れなかったら、家にひきこもったままで、どうなっていたのか、続いていたのかなんて思う。大きな転換だった。思い出が沢山できた。 ・初めて通帳を作ったり、車の免許取ったり、自転車を買ったり、ライブに行ったり、友達に電話、人生が変わった。 ・この数年は、うつみたいになったり、しんどかったことが何度かある。仕事では、信頼関係が大事と思い、何とか続けていきたい。 ・自ホームから、たまに「お便り」が届くことがあって懐かしいと思う。連絡もとりたくなければとれるので、安心。 ・育ってきた家庭のようになりたくない。子どもをもつとしても同じようになりたくない。自分らしく生きたい。 |

表2（つづき）

| | |
|---|--|
| K | <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の時は、自分から気持ちを伝えたり、人とコミュニケーションをするのがすごく苦手だったけれど、中学に入って、同じ施設の友達もいて安心できた。好きな体育、手芸や木工とかも楽しくて、周りに人から「器用だね」とほめられて嬉しかった。 ・中学3年間は自分にとって一番大事で、マラソンやバスケの大会とか、それまで最後までやり遂げることがなかった。 ・自ホームに来て、働き出してから、職場でいじめや暴力を受けたり、大変なことがあって、〇〇や△△、□□が話を聞いてくれて力になってくれた。僕の作った刺繍の作品をほめてくれて、ホームに飾ってくれたり、今でも大切に持っていてくれる人がいて嬉しい。 ・自ホームは、僕にとって、無くてはならなかったところ。今その近くに住んでいて、〇〇や△△には、人間関係や生活のことで相談にのってもらったり、気持ちのうえでも頼っているところがある。 ・今の目標は、ずっと支えてもらってばかりなので生保を辞めて働いて、自立しないといけないと思っている。 |
| L | <ul style="list-style-type: none"> ・施設に来てからは平和な生活が続いた。友だちと遊んで、勉強もそこそこできて。職員が時計の文字盤の読み方も教えてくれた。 ・ほめてくれて叱ってくれて、職員は親代わり。規則的に食べて寝て、身長が伸びて健康診断の結果が嬉しかった。 ・高校に入って家に帰ってから母親からの虐待が始まって、死のうと思ったこともあった。知り合いの人が逃げ出していいと言ってきて、シェルターから自ホームに来て安心した。止まった時間が戻ってきたなって思った。 ・自ホームでは、いつも〇〇や△△が話を聞いてほしいと思う時に話を聞いてくれて、そのまま眠ってしまったこともあった。その自ホームは自分には無くてはならないところだった。 ・〇〇や△△は結婚式にも来てくれて、今は遠くから見守ってくれている感じ。 |
| M | <ul style="list-style-type: none"> ・施設にいた間は短かったけれど、もと大学で山岳部だった職員の〇〇がいて、本格的な登山に連れていってくれて。何日もかけて準備をして、体力もつけて登った時の達成感は忘れられない。 ・冬の間だけ、スキーのアルバイトがあって、山だし、「絶対行きたい」といった時に、△△は「Mらしいなあ」と言って行かせてくれた。今の仕事や暮らし、ここで生活しているのは、その時に行かせてくれたからだと思っている。 ・施設の職員の人たちは、施設を出てからのほうが長いつきあいだった。職員というよりも個人としてという感じの関わりでみていてくれた。仕事も住むところも、失敗するたびに相談にのってもらって。まさか、結婚もできて、子どもも生まれるなんていう人生になるとは思わなかった。〇〇、△△は結婚式にも来てくれて今も遠い親戚かなにかのように思っている。△△との縁で自分がつながった人は、自分にとっても大事な縁のある人。その人たちがいなくなったら、こうして今の自分はいない。 |
| N | <ul style="list-style-type: none"> ・物心ついた時は施設にいて、施設は、生きていくうえで世話をしてくれたところ。気が弱いほうだったけれど、相撲やマラソン、ストーブの薪割りとかをしているうちに体力がついて運動も得意になって、身体がつくれたと思う。今も健康なのはそのおかげと思っているし、バザーとか行事で地域の人との関わりもあって、今の仕事での人との関わり方の基本的なことが身についたと思っている。 ・高校の時には熱帯魚に集中しちゃって・・・。「飼いたい」と言った時に、熱帯魚を好きな職員が「飼おう」となっている。その人も熱帯魚が好きで、毎日熱帯魚の前でぼんやり眺めている時間が癒しだった。 ・小さい時に親のことを職員の先生たち聞き回ったけれど、誰も答えてくれず、あきらめていた。施設を出る時に初めて、〇〇から親のことを聞いた時には、「なんで今更？」と思った。途方にくれたし、怒りもあった。ただ、その〇〇はその後もずっと僕のことを気にかけてくれていて。今も施設に遊びに行った時に〇〇と話をしたり、「どうしりたい？」と逆に助言を求められることも。大人と大人との関係というか頼りにしてくれている。昔は昔、今は今と思えるようになって、今、どういう人間関係なのかっていうことが大事だと思う。 ・ずっと心に残っているのは、大学受験の前日に、高校の制服を着ていくっていうのがあって。アイロンをかけるように言われていたときに、△△が黙ってアイロンをかけてくれていて。担当の職員ではなかったし、「しなくていいよ」って言ったら、「そんなことはないよ、当たり前だからやらせて」って言ってきて、優しくてあたたかかった。すごく感動した。 ・当事者グループに行っていた時は、そこが居場所だった時期もあった。仕事の悩みとかも聞いてくれて。自分も□□のようになりたいって思える出会いもあった。 ・ずっと続けている職場でお客さんから信頼してもらえるようになってきて。嬉しくてやりがいがある。 |
| O | <ul style="list-style-type: none"> ・施設にいてよかったのは、沢山友達がいたこと。同じ施設の友達だけでなく、普通の家庭で育った友達が僕と普通に関わってくれたのがよかった。「Oのところは、門限厳しいだろう。だからうち来る？」みたいな感じで遊びに行っていた。逆に、施設に遊びに来てもらって遅くなって、みんなで職員から叱られたり、そういうのも楽しい思い出。何人かは今もメールや旅行とか、交流がある。 ・施設ではいろんな行事があって、手作りで工夫して楽しんで、普通の家庭では経験できないことをさせてもらった。そういうのが今の仕事にもすごく活かしている。してもらったことを、今度は自分がしていく番。仕事は大変だけれど天職という感じ。 ・施設で育ったみんなが僕のように「ここよかった」と思っていない人もいると思う。環境なのか、自分の気質的なことなのか、出会いなのか、ふりかえてみてもよくわからない。けれど、大事なと思うのは、自分らしくいられる、いさせてもらえること。 ・職場では、ずっと〇〇や△△に育ててもらえて恵まれている。昇進や異動があって全身にアレルギーが出たときもみまもってくれた。絶対、「子どもにとって」っていう視点を外さずに、そこに立ち返って仕事をしている。僕も、若い人を育てる側になってきていて、施設で育った僕だからこそ、できることもあると思っている。 |

注：語りのなかで、施設職員の名前、通称、呼び名があった部分について、特定を避けるため、「〇〇」「△△」「□□」と表記している。

さんは、現在もその友達と交流があり、メールをしたり旅行に行ったりする間柄だという。Hさんは結婚のとき、パートナーの親から生い立ちのことで反対されるかと思っていたが、偏見が無かったことに感謝している。

iv) 「したいことができた」・「自分で選択できた」

15人の語りにみられる。例えばBさんは、施設に来た当初は家にいた時と同様に「人のそばで話を聞いているのが好き」だったという。それが次第に、「自分から話をしたく」なり、「聞いてほしい」と思うようになり、そのような気持ちを「出させてくれていた」のではないかとふりかえっている。また、Cさんは「チョイス（選択）ができるようになって、人間になれた」という。本人がこうしたいという気持ち（自主性や主体性）を育てたり、したいことを叶えたり、実現に向けて支えられた内容がある。

②施設退所後の生活のなかで、新たに／改めて、力をもらったこと、支えになったこと

i) 安心できる場所と人とのつながり

表2からは調査協力者15人全てが、以前生活していた施設とそこで関わりのあった人について、つながりを感じていることが分かる。退所して間もない頃から時を経た現在は、物理的には遠くても心のなかでは近くに感じているIさんの語りがある。退所して間もないころ、当事者団体が、居場所になり、仕事の悩みを聞いてもらえたという人もいる（Nさん）。

ii) 日常生活の営み、衣食住等について

ここでは、以前に生活していた施設の職員（Cさん、Gさん、Mさん）のほか、父親（Eさん）や義父母（Iさん）からの支えがあったことが語られていた。

iii) 仕事・職場に関して

仕事に関しては、施設職員による支え（Aさん、Bさん、Dさん、Fさん）のほか、義父母や職場の上司に育ててもらった（Gさん、Hさん、Oさん）という語りがある。

iv) 進学や進路選択・学費等

例えばBさんは、職場を解雇されて途方にくれて施設職員に相談した時、単に就職のことだけではなく、本人が以前望んでいた大学進学の夢を「覚えてくれて」いたことが嬉しかったという。Gさんは、親は何もしてくれなかったけれど「学費だけは出してくれていた」と語る。

v) 結婚・妊娠・出産・子育て

頼る人が身近にいない不安のなかで妊娠・出産を迎えたAさんが支えられたのは以前生活していた施設の職員である。離婚と借金、親権の問題等で悩んでいたCさんが支えられたのも、以前の施設職員の「子どもをここで預かっていいよ」という言葉であった。

なお、表2に全て示していないが、Bさん、Cさん、Dさん、Gさん、Hさん、Iさん、Lさん、Mさんは、結婚や子育てに関してパートナーの親（義父母）が応援してくれたり、手伝ってくれたり、行き来していたりという状況があった。DさんやEさんはきょうだいや知

り合いの人からの支えについても語っている。

vi) 心身の健康状態

3人の子どもを育てているAさん、ひとり親家庭で「うつ」などの症状もあるDさん、事故で命が危ぶまれたCさん、職場の異動や昇進などで心身の不調やストレスを抱えたHさん、Oさん、外に出て働きたいが困難な状況にあるKさんなどの語りがある。心身の健康状況については、それだけが単独で困難というよりは、「子育て」や「就労」等、生活の営みのなかで抱えるストレスと関連していることが示唆される。このなかには、元の施設職員だけではなく、家族を含む身内や、職場の上司などの支えのあった人がいることが分かる。

vii) 金銭面のトラブル・借金・経済的な困窮

アルバイトや生活保護制度の利用の紹介等、直接的・間接的な支援を、以前生活していた施設等から受けていることに関する語りがみられた（Aさん、Dさん、Kさん）。

なお、先行調査・研究では、施設等退所後の困難の一つとして示されている経済的な問題について、本調査のインタビューでの把握では十分ではない。経済的な困窮それ自体が単独で生じているというより、離婚、子育て、心身の健康の不調等、他の困難と複合して「大変」としていることは示唆された（Aさん、Cさん、Dさん、Kさん）¹⁰⁾。

(2) 力をもらったり、支えられた経験を通して、「していきたいこと」

上述のように、インタビューでは、力をもらったり、支えられた経験を通して、本人自ら「今度は〇〇していきたい」、「役に立ちたい」という内容を語った人もいる。

例えば、自分の子どもや家族について、「ぶつかったら助けてあげるよ」（Aさん）、「したいと思うことをしていってほしい」（Bさん）という語りがある。

また、実親との関係に変化が生じ、それぞれのペースややり方で関わっていききたいことを語ったのはCさん、Fさん、Gさん、Hさんであった。

さらに、仕事や地域の社会活動を通して、「役に立ちたい」、「人に喜んでもらえる仕事をしたい」、「お客さんを大事にしたい」、「職場の若い人を支えていきたい」といった語りは、Aさん、Eさん、Fさん、Hさん、Nさん、Oさんにみられた。

そして、自分自身の生き方については、継続していくことの大切さや、自立すること、自分らしく生きること、信頼関係の大切さ等が語られている（Gさん、Jさん、Kさん）。

以上のように、B調査の結果からは、調査協力者の15人が様々な生活状況の困難や不安定さを抱えながらも、全体としては生活の営みを維持・継続していることが分かった。

また、生、生活の営みのなかで力をもらったり、支えとなっていることについては、施設に入所中のそれらの経験の記憶が現在もお活き活きと本人のなかにあることが示唆され、退所後の生活では、子どもの頃に生活していた施設職員との関わりや、家族（パートナー・子ども、義父母）、職場の人、友人等から力をもらっていることが分かった。実親との関係性に変

容がある人もみられた。このような経験のなかで、今度は本人が役に立ったり、他者を支えていく存在になっていきたいと考えている人がいることも示された。

Ⅳ. 結びにかえて－まとめと課題

本稿の目的は、社会的養護経験者15人へのインタビューを通して、本人が退所後の生活のなかで、「どのようなところから力をもらってきたのか」、「どのようなことが支えになっているのか」に関する語りに着目して検討し、どのような支援が求められているのかを考察することであった。具体的には、初回インタビューから6～10年を経た追調査（B調査）をもとに分析した。その結果、次のようなことが示唆された。

第1に、社会的養護経験者が「力をもらった」り、「支えとなっている」経験には、本人と関わりのある“特定の人（個人）”の存在がある。施設退所後の生活においても、入所中のこれらの経験の記憶が、本人のその後の生を支える大切なものとして存在している。

第2に、その支えとなった“特定の人（個人）”について、最も多かったものは、本人が生活していた施設職員であった。この背景には、本人が施設等入所前の被虐待やネグレクト、生活上の不安や困難な状況のもとで分離を余儀なくされた親子関係から、新たに社会的養護という枠組みの支援において、施設職員という血縁関係の無い第三者と出会い、これまでとは異なる関係性——すなわち、ソーシャルワークにおける「援助関係」を結んでいく過程において、「力をもらった」り、「支えられた」経験を積み重ねていることがある。その関わりの中で、本人は、社会的養護のもとで新たに出会った他者を、単に“施設職員”という一括りでみているのではなく、自分を「みていてくれた」人、自分のために「してくれた」人という、かけがえのない“個人”、“人（ひと）”としてとらえていることが浮き彫りになった。この他、友人や教師など、本人を受けとめてくれた人の存在を語った人もいる。

第3に、施設退所後における生活上の不安や困難のなかで、「力をもらった」り、「支えられた」経験においても、本人にとって大切な“人”が存在しているが、それは施設職員との「個人的な関わり」のほか、パートナーや子ども等の形成家族、本人の職場の人、友人等もある。

第4に、人から力をもらい、支えられた経験から、今度は人を支えていく側になっていきたい、自分自身がこうしていきたいという転換が生じている。ここには、他者あるいは自分に対して、自身のもっている力を活かしていこうという、本人の“主体性”の育ちと発揮がある。

以上のことから、社会的養護を経験した人々の施設等退所後の支援には、様々な生活上の不安や困難におかれても、本人が「力をもらった」り、「支えとなる」“人”との関係性を結んでいけるような支援を、入所中から行っていくことが重要であると考えられる。しかもそれは、施設職員を基盤としつつ、友人や教師、原家族との関わりの変容等を含めて、子ども自身が必要とする社会関係のなかで展開していくことが求められる。また、社会的養護における子どもと職員との関係性——援助関係——において、子どもは、施設職員をその役職や任務としてみてい

るのではなく、その職員のなかに立ち現われる“個人”、“人”をみて、そこに信頼を寄せていることを、私たちは忘れてはならない。また、その関係性のなかで、本人が受けとめられ、本人の生とニーズが肯定されている積み重ねが本人自身に実感されていることが大切であろう。

勿論このことは、決して、ソーシャルワークにおける専門性や専門職性を否定するものではない。支援内容についても、先行調査や研究でも指摘されているような、社会生活を営むための生活スキルを身につけていくことや、学力や学歴を付けていくこと、経済的支援や就労支援等を保障していくようなリービングケアやアフターケア、本人にとってのライフチャンスの保障の実現が重要であることに変わりはない。

トラウマ研究の第一人者である L. ハーマンは、「回復のための第一原則はその後を生きる者の中に力を与えることにある。その後を生きる者自身が自分の回復の主体であり判定者でなければならない。その人以外の人間は、助言をし、支持し、そばにいて、立会い、手を添え、助け、温かい感情を向け、ケアをすることはできるが、治療^{キユア}するのはその人である。善意にあふれ意図するところもよい救援の試みの多くが挫折するのは有力化（エンパワメント）という基本原則が見られない場合である」と述べる（J. L. Herman=1996:205-206）。

また、稲沢は、尾崎新や窪田暁子のエピソードをふまえ、「援助者」と「クライアント」とではなく、「わたし」と「あなた」との関係、すなわち「人」と「人」との関係が「援助の出発点」であり、「現場の力の基礎」と位置付けていると指摘する。そして、援助者はいつでも逃げ出せる者であり、クライアントはそのことを「知り抜いている」なかで、『逃げられる者』と『逃げられない者』との関係性を新たな非対称性、すなわち『逃げない者』と『逃げられない者』との関係性へと能動的に変換する覚悟、「逃げない」という援助者の覚悟が「援助の出発点」を形づくと述べる。つまり、「援助者」は「見捨てない」という選択である（稲沢 2017:149-170）。

これらは、援助者が（良かれと思って）本人に何かを「させる」のではなく、本人が「本当にしたい」と思う心が育つような支援と、そうした本人のニーズを実現していく支援の過程において、本人を大勢の中の一人ではなく、“個人”として、“人”として「み続けていく」、「関わり続けていく」の営みが大切であるといえよう。

高安（2017）は、児童養護施設退所者の自立のプロセスを分析し、職員との関係性が自立に向けて重要であると説く。また、高橋（2011）は、研究方法としてナラティブ・アプローチを用いて、児童養護施設の退所支援では「むすびつきの創出」が重要であると指摘する。高橋はまた「自立支援においては、子どもが自立に向かうために、それを支える支援者との関係性をどのように築いていくのが重要となる」、「支援者との関係に根ざしながら、いつでも他者を頼り、帰ってこられる場所として施設を機能させること、さらに多様な社会資源にアクセスできるだけの道筋を子ども達に実践的に身に着けさせることなどが、今後必要になってくるのではないだろうか」と述べ、援助者との対等性に基づく関係の構築が、「子どもの主体性に基づ

く協働への転換を促す」とする（高橋 2013:31）これらの内容は、本稿で示唆された結果とも共通する。

こうした援助関係、関係性を重視するとすれば、援助者である施設職員を支えるしくみと援助者への支援が不可欠である。2016年に児童福祉法が改正され¹¹⁾、その理念の具現化に向けて2017年には「新しい社会的養育ビジョン」（「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」）が示された¹²⁾。これらの動向を見据えながら、社会的養護の転換期において、ケアを受けた／受けている本人にとってはどうなのかという視点からの検討を引き続き行っていきたい¹³⁾。

本稿で得た結果は、15人の語りから例示された一部であり、その内容も個別的であるため、一般化・普遍化に向けての限界がある。今後は、生活史インタビューにおける本人の語りの全体像を見渡し、質的調査におけるナラティブの分析方法を用いた検討が課題となる。その際、語り手の主観的な生活世界の観点から、傷ついた経験やつらかった経験に関する語り（生の営みの困難に関する語り）を含め、本人にとって、どのようなときに、どのような人との関係において、どのようなことが助けとなり生きる力をもらったのか（生の営みの肯定・回復に関する語り）に着目する。そのうえで、社会的養護のもとで育つ子ども・若者への支援について、ソーシャルワークの支援過程と援助関係の理論的検討をふまえて考察することを課題とした。

注

- 1) 京都市は、市内の過去10年間の施設等退所者を対象に実態調査を行った。集計と分析・考察には、佛教大学の長瀬正子と伊部恭子が携わっている。3種類の調査のうち、アンケート調査の対象は、15歳以上の退所者327人であった。このうち、実際に調査票を郵送できたのは217人（66.4%）、回答者数は93人（28.4%）、有効回答者数91人（27.8%）である。本人の連絡先不明等により調査票を郵送できなかった人は3割強にのぼる。
- 2) 東京都では調査結果をふまえ、2012年度より、全国に先駆けて入所中の児童の就職・進学に向けた準備から退所後まで継続的な支援を専任で行う「自立支援コーディネーター」を児童養護施設に配置し、2013年度からは、就労に関する相談支援を行う「ジョブ・トレーナー」を自立援助ホームに配置する取組を開始している。
- 3) 永野は、計6つの調査結果と公表統計を用いて二次分析を行っている。社会的養護を離れた若者のライフチャンスについて、量的な把握の視点から、オプション（選択肢）としての「(1) 教育機会、(2) 就職機会、(3) 生活移行、(4) 経済」を検討し、リガチュア（社会的なつながり）の状況として、「退所した施設とのつながりが切れていく状況」を明らかにしている。また、社会的養護のもとで生活を経験した21人へのインタビュー調査によって質的把握を行い、社会的養護のもとでのライフチャンスの状況と保障に向けた方策を検討、課題を提起している。
- 4) インタビューでは、本人から、しばしば“このことは伝えたい”，“このことは話したい”という思い

を、目の輝き、声のトーンや大きさ、表情、身ぶり等を通して受け取ることがあった。

- 5) 追調査を計画するにあたり、A 調査の調査協力者のなかで数名から「もう一度インタビューしてもらっても構わない」、「数年後にまた話をしたい」という声を聴かせていただいたことも背景にある。
- 6) 現在までに協力を得ていない16人は、以下のようである。A 調査時に本人の紹介先となっていた施設・当事者団体等が本人と連絡が取れない状況にある（7人）、本人の心身の健康上の面から困難（3人）、仕事等で忙しく困難（2人）、本人の死亡（1人）、その他、本人の事情等（3人）である。B 調査は計画上、2018年度までを予定しているため、本稿はこれまでに実施した経過報告となる。
- 7) 「日本社会福祉学会研究倫理指針」、「佛教大学研究倫理指針」を厳守し、インタビューの実施では、特に調査協力者の人権と安全を最優先にするよう努めた。紹介先である施設等と調査協力者本人とは、其々文書による契約を交わし、研究倫理の遵守を説明の上、同意・承諾を得た。録音の逐語化はすべて、伊部が行った。調査結果の公表に関しても、調査協力者本人が特定されないよう十分配慮する。
- 8) ここでいう主な内容の例示とは、B 調査時に、調査協力者本人が強調して語ったり、繰り返し語ったり、先のA 調査で語られた内容や思いを、改めて再度語っているもの等である。
- 9) 前回A 調査の調査協力者は、31人中、男性18人、女性13人であった。
- 10) A・B 調査では、直接、筆者から積極的かつ具体的にインタビューのなかで調査協力者の収入や借金、金銭面に関する状況や困難等を聴き取っていない。デリケートな内容を含むため、調査協力者本人の語りのなかで、それらが語られた時には、丁寧に聴き取るように努めた。
- 11) 2016年の改正児童福祉法において、自立援助ホームでは、大学等に就学中等の場合は22歳の年度末まで継続しての入居が可能となった。児童養護施設等の入所児童は18歳（措置延長では20歳）に到達後も、22歳の年度末まで引き続き必要な支援を受けることが可能となった（社会的養護児童自立援助事業）。2018年度からは社会的養護のもとで生活していた人を含む低所得者の高等教育進学への給付型奨学金制度が創設されている。
- 12) そこでは子どもが権利の主体であることが明確にされ、家庭養育優先の理念や、実親による養育が困難な場合に養子縁組による永続的解決（パーマネンシーの保障）や里親による養育を推進し、社会的養護に関する施設の見直し（小規模化、地域分散化、適切な職員配置、高機能化等）が示されている。
- 13) グッドマンは、「おそらく児童養護施設の働きが成功したかどうか判定する最も重要な目安は、退所後の子どもがどうなるかということであろう。」と述べている（Goodman, R=2006）。

文献

新たな社会的養育の在り方に関する検討委員会（2017）「新しい社会的養育ビジョン」。

遠藤野ゆり（2009）『虐待された子どもたちの自立——現象学からみた思春期の意識』東京大学出版会。

Goodman, Roger（2000）Children of the Japanese State: The Changing Role of Child Protection Institutions in Contemporary Japan, Oxford University Press.（=2006, 津崎哲雄訳『日本の児童養護——児童養護学への招待』明石書店。）

- 長谷川真人 (2000) 『児童養護施設の子どもたちはいま——過去・現在・未来を語る』 三学出版.
- Herman, J. L. (1992) Trauma and Recovery, New York: Basic Books. (=1996, 中井久夫訳『心的外傷と回復』みすず書房.)
- 平松喜代江 (2017) 「児童養護施設における社会自立に関する課題——大学等進学について」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要』 18, 113-118.
- 堀文次 (1948) 「保護児童のアフターケアの問題」『社会事業』 31(5).
- 伊部恭子 (1995) 「養護施設における『進路指導』の史的展開——高校進学を中心に」『東洋大学大学院紀要』 31, 173-185.
- 伊部恭子 (2011) 「ある自立援助ホーム利用経験者の生活と社会的つながり——生活史インタビューから」『佛教大学福祉教育開発センター』 8, 1-34.
- 伊部恭子 (2012) 「社会的養護を受けた人々に聞く生活史——施設入所に至る経緯と入所後約1年に着目して」古川孝順監修『社会福祉の理論と運営——社会福祉とはなにか』筒井書房, 352-377.
- 伊部恭子 (2013) 「施設退所後に家庭復帰をした当事者の生活と支援——社会的養護を受けた人々への生活史聞き取りを通して」『佛教大学社会福祉学部論集』 9, 1-26.
- 伊部恭子 (2014) 「社会的養護における自立支援——施設経験者への生活史聞き取りを通して」古川孝順監修『再構 児童福祉——子どもたち自身のために』筒井書房, 236-259.
- 伊部恭子 (2015 a) 「社会的養護における支援課題としての権利擁護と社会関係の形成——社会的養護経験者の生活史聞き取りから」『佛教大学福祉教育開発センター』 12, 1-16.
- 伊部恭子 (2015 b) 「援助の終結とその評価の意義」, 児島亜紀子編『社会福祉実践における主体性を尊重した対等な関わりは可能か——利用者-援助者関係を考える』ミネルヴァ書房, 227-261.
- 稲沢公一 (2017) 『援助関係論入門——「人と人との」関係性』有斐閣.
- 井上寿美・笹倉千佳弘 (2017) 「児童養護施設退所後の自立困難軽減に向けた地域養護活動の可能性——旧・沢内村(現・西和賀町)における取り組みを事例として」『大阪大谷大学紀要』 51, 129-148.
- 井上康子 (2015) 「児童養護施設経験者の心理と支えについての一考察——『語られない語り』への関わりの観点から」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』 17, 1-13.
- 伊藤嘉余子 (2016) 「児童養護施設におけるアフターケアの課題——退所理由に焦点をあてて」『社会問題研究』 65, 17-30.
- 片岡志保 (2016) 「児童養護理論・実践・政策の関係についての一考察——戦時下ならびに戦争直後における実践の変質から」日本福祉大学社会福祉学部『日本福祉大学社会福祉論集』 134, 153-171.
- 神奈川県児童福祉施設職員研究会(神児研)調査研究委員会 (2013) 「神奈川県児童養護施設等退所者追跡調査」
- 菅野恵 (2016) 「児童養護施設における家庭復帰の非促進要因——非促進群の複数事例の検討を含めて」『和光大学現代人間学部紀要』 9, 19-26.
- 国分美希 (2001) 「被虐待体験からの再生と成長を支えるもの——フォローアップ調査をもとに」『臨床心理

学』1(6), 757-763.

久保原大（2016）「児童養護施設退所者の人的ネットワーク形成——児童養護施設退所者の追跡調査より」『社会学論考』37, 1-28.

窪田暁子（2013）『福祉援助の臨床——共感する他者として』誠信書房.

京都市（2017）「児童養護施設等退所者の生活状況及び支援に関する調査報告書」.

松本伊智朗（1987）「養護施設卒園者の『生活構造』——『貧困』の固定的性格に関する一考察」『北海道大学教育学部紀要』49, 43-119.

永野咲（2017）『社会的養護のもとで育つ若者の「ライフチャンス」——選択肢とつながりの保障, 「生の不安定さ」からの解放を求めて』明石書店.

西田芳正編著, 妻木進吾・長瀬正子・内田龍史著（2011）『児童養護施設と社会的排除——家族依存社会の臨界』解放出版社.

西本佳代（2016）「大学に進学した児童養護施設入所経験者の実態と支援」『大学教育学会誌』38(1), 118-126.

小川利夫・村岡末広・長谷川真人・高橋正教（1983）『ぼくたちの15歳——養護施設児童の高校進学問題』ミネルヴァ書房.

大村海太（2015）「児童養護施設退所者への自立支援の歴史に関する一考察（1）——戦前から1990年代前半までの政策に焦点を当てて」『駒沢女子短期大学研究紀要』48, 53-60.

大村海太（2017）「児童養護施設退所者への自立支援の歴史に関する一考察（2）——1990年代後半から現在までの政策に焦点をあてて」『駒沢女子短期大学研究紀要』50, 43-53.

大阪府（2017）『「児童養護施設退所児童等の実態調査」調査結果報告について（概要）」(<http://www.pref.osaka.lg.jp/kosodateshien/kodomo/index.html> 2018. 2. 1).

大阪市（2012）「施設退所児童支援のための実態調査報告書」.

大塚類（2009）『施設で暮らす子どもたちの成長——他者と共に生きることへの現象学的まなざし』東京大学出版会.

両見志麻（2005）「児童養護施設卒園生へのナラティブ・アプローチ——施設で育ったわたしの物語」武蔵野大学大学院紀要 5, 99-112.

埼玉県福祉部 こども安全課（2013）「埼玉県における児童養護施設等退所者への実態調査報告書」.

櫻谷眞理子「児童養護施設退所者へのアフターケアに関する研究——社会的自立を支えるための施設職員の役割を中心に」『立命館産業社会論集』49(4), 139-149.

青少年福祉センター編（1975）『絆なき者たち』人間の科学社.

青少年福祉センター編（1989）『強いられる「自立」——高齢児童の養護への道を探る』ミネルヴァ書房.

静岡県児童養護施設協議会（2012）「静岡県における児童養護施設退所者への実態調査報告書」.

新藤こずえ（2016）「児童養護施設における障害のある子どものライフコースに関する一考察」『立正大学社会福祉研究所年報』18, 15-22.

社会的養護経験者が語る「支えられた経験」とその意味——15人への生活史聴き取りを通して

- 田淵桃代（2017）「児童養護施設における入所児童のレジリエンスを高める支援」『天理大学 社会福祉学研究室紀要』19, 87-101.
- 高橋菜穂子（2011）「児童養護施設の自立支援におけるむすびつき創出のための課題——ナラティブ・アプローチとの関連から」『教育方法の探求』14, 33-40.
- 高橋菜穂子（2013）「児童養護施設職員による長期的意味づけから捉える自立支援の展望」『教育方法の探求』16, 25-32.
- 高安和世（2017）「児童養護施設退所者が自立していくプロセスに関する研究——職員との関係性形成の視点から」『社会学論叢』日本大学社会学会 190, 21-42.
- 田中理恵（2004）『家族崩壊と子どものスティグマ——家族崩壊後の子どもの社会化研究』九州大学出版会.
- 谷口由希子（2006）「児童養護施設の子どもたちと生活の立て直しの困難性——脆弱な生活基盤の家族・子どもと社会的排除の様相」『教育』731, 国土社, 26-33.
- 谷口由希子（2011）『児童養護施設の子どもたちの生活過程——子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店.
- 特定非営利活動法人杜の家（2014）「平成 25 年度岡山市市民協働推進モデル事業 施設児童退所支援のための実態調査 調査報告書」
- 東京都福祉保健局（2011）「東京都における児童養護施設等退所者へのアンケート調査報告書」
- 東京都福祉保健局（2017）「東京都における児童養護施設等退所者の実態調査報告書（全体版）」
- 坪井瞳（2011）「児童養護施設の子どもの高校進学問題——非進学者の動向に着目して」『大妻女子大学家政系研究紀要』47, 71-77.
- 全国社会福祉協議会（2009）『子どもの育みの本質と実践』社会的養護を必要とする児童の発達・発育過程におけるケアと自立支援の拡充のための調査研究事業 調査報告書.

謝 辞

本調査研究にご協力をいただきました皆様に心から御礼を申し上げます。

付 記

本稿は、2010～2013 年度科学研究費補助金（基盤研究 C、課題番号：22530645）「社会的養護における支援課題としての社会関係形成－児童養護施設経験者の生活史から－」（研究代表者：伊部恭子）および 2014～2018 年度科学研究費（基盤研究 C、課題番号：26380808）「社会的養護における成人期移行に関する生活・自立支援－施設経験者の生活史から－」（研究代表者：伊部恭子）における研究成果の一部である。

（いべ きょうこ 社会福祉学部）